

発達障害の可能性のある 児童生徒等に対する支援事業

■ 市町村名	: 伊那市
■ 担当部署	: 学校教育課 子ども相談係
■ 事業年度	: 平成26年度
■ 総事業費	: 4,009 (千円)
うち国補助金	: 4,009 (千円)

モデル事業の名称

(文部科学省委託事業)
発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業

事業の目的・概要

通常学級においては、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒は6.5%程度の割合で在籍していることが明らかになっており、同時にそれ以外にも学習面や行動面で何らかの困難を示していると教員が捉えている児童生徒がいることが示唆されている。

この現状に対し、国においては、「障害者の権利に関する条約」の趣旨を踏まえ、障害の可能性のある児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばし、自立や社会参加するために必要な力をつけるための特別支援教育の推進が求められている。

本市では、平成24年より、学習面、特に基礎的な読み書きの習得に困難のある児童に着目し、その発見及び効果的な支援について、市内にモデル校を置き検討を重ねてきた。その結果、①読み書きの習得がゆっくりな児童に気づいている教員は多いが、いずれ獲得するだろうと考え、特別なサポートがなされていない、②特別なサポートがわからず従来の指導のくり返しになっている、③特別なサポートは業務量的に難しいと思っている教員が多い、等の状況があることがわかった。

そこで平成26年度は「通常の学級において、学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒に対して、それら児童生徒が理解しやすいよう配慮した授業等、指導方法の改善等を行う」国の研究事業を受託し、モデル校の伊那北小学校で通常学級に在籍する全ての児童が基礎的な読み書き能力を身につけるための支援方法を研究した。



国語道場でのことわざ検定



給食の時間を使った読みの練習

実施内容

- 「読み書き支援運営協議会」の立ち上げ（4月）
構成員：モデル校（伊那北小）の特別支援教育コーディネーター、校長、市教育委員会事務局など計11名
- 全児童の読み書きの実態を把握するためのスクリーニング検査の実施（6月）
- 多層指導モデルMIMを1年生のひらがな学習にあわせて導入
- 読みの力、語彙力、言葉への興味を高めるための「国語道場」（校長室）の開設
- 読み書きのつまずきの程度、誤りパターンに応じた小集団での補習指導の実施
実施人数：1年生8名 2年生22名 3年生13名 4年生2名 5年生3名 6年生3名
- 多層指導モデルMIM、漢字の指導方法について研修会の実施（5月・6月・10月）
- 漢字の指導教材の工夫

事業効果

- (1)スクリーニング検査によって、読み書きの習得が困難な児童を客観的に把握でき、通常学級での小集団での補習指導へつなげることができた。
- (2)MIM研修をモデル校の全教職員が受けたことで、MIMの理論や方法を知るだけでなく、読み書きの能力を高めるためには、語彙力や話し言葉などの言語能力の豊かさも大切であることが理解できた。MIMの一環で校長室に設けた「国語道場」を学校全体で盛り上げるなどの動きがみられたことは大きな成果といえる。
- (3)MIMは、MIM-PMというアセスメントにより、指導の効果がすぐに担任にフィードバックされるため、教員の「つまずきがみられる子」への認識が高まり、MIM指導時間以外の日常的な指導でもより細かい指導が子どもへ届いたといえる。
- (4)小集団の補習指導のなかで、個々の達成レベルでほめられたり、できたことを認められ、子どもの読み書きへの取り組み意欲が高まった。

今後の展開

- (1)漢字については、MIMのように系統的な指導方法がないので、スクリーニング検査等から、児童の「個々」のつまずきの内容や支援の方法はわかったが、個々のニーズに斉授業や通常学級でどうこたえていくのか、方略を見出すことができなかった。平成27年度は、漢字の指導方法に力を入れ研究する。
- (2)今回の研究で効果のあった取り組みを伊那市の全小学校へ拡げていく。平成26年度のモデル校は、通級指導教室があり専門性の高い職員が配置されていたので、校内で本事業をリードし、成果につなげていくことができたが、他校ですぐに同様の取り組みを行うことは難しいと考えられる。先行したモデル校への見学・相談を随時行える体制や、各校に読み書きリーダーをつくる等の組織的な体制づくりも行っていく。